

深い学びをデザインする授業づくり ～主体性を発揮させることを通して～（２年次）

I 主題設定の理由

学校教育、とりわけ義務教育では、一斉一律、みんなで同じことを、同じようにする授業が多く行われ、ピーター・グレイは「もし義務教育があれば、強制的な教育があるのは当たり前です。『義務』という言葉にもし意味があるとすれば、それは『当事者に選択がない』という意味です。」¹⁾と述べている。実際、授業では教師が課題を与え、与えられた課題を作業のように解決する生徒も見受けられることを考えると、義務教育というものが生徒にとっては受動的なものであると捉えることもできてしまい、主体性を発揮して取り組む活動ではないとも捉えられる。その要因の一つとして、奈須正裕は「学びの文脈が取れないような課題なり場面を教師が設定していること」²⁾が無気力な生徒を生み出すと述べており、生徒が主体性を発揮して学習に向かうことを教師が授業の中で支援する必要がある。

主体性を発揮して学習に向かう生徒の姿を考えたとき、白井俊は、主体性について「実は『主体的』や『主体性』の捉え方は曖昧であることも多い。～中略～。『主体的』や『主体性』が本来目指すところが、単に教師の指示どおりに行動することではないとしても、反対に、生徒による自発的な行動であれば何でも良いというものでもない」³⁾と述べている。さらに、白井俊は、OECDのラーニングコンパス・コンセプトノートで「働きかけられるというよりも自らが働きかけることであり、型にはめ込まれるというよりも自ら型を作ることであり、また他人の判断や選択に左右されるというよりも責任を持った判断や選択を行うこと」⁴⁾と説明されているエージェンシー^{注1)}と主体性の関係も示唆している。学習において、単に生徒が興味の湧く課題を教師が提示するということのみではなく、一人一人の生徒が自ら学びの機会を設定できる場面を教師が設定し、文脈に沿った深い学びをさせることが求められる。

また、令和３年１月に中教審答申で「令和の日本型学校教育」の構築が目指され、その中で、「目の前の事象から解決すべき課題を見だし、主体的に考え、多様な立場の者が協働的に議論し、納得解を生み出すことなど」⁵⁾が目指す資質・能力として示されており、現行の学習指導要領で育成を目指す「主体的・対話的で深い学び」と深くかかわる内容でもある。

そこで本校では、深い学びを達成するためには主体性を発揮させることが必要だと考え、主体性を発揮させるために、課題や問題^{注2)}の解決方法を自ら考え選択したり、時には課題や問題などを自ら見出したり、追究したりしていく場面を設定することとし、研究を進めていく。その際、主体性を発揮し、自らの学びをコントロールして思考するもととなる知識を獲得させるために、３年間を見通した単元構想が必要となるのは言うまでもない。

しかし、生徒が主体性を発揮すれば、必ずしも深い学びを達成するとは限らない。そのため、主体性を発揮した生徒が、各教科の目指す深い学びを達成できるよう、教師の手立てによって学びの文脈^{注3)}をつくる必要があると考える。生徒が、主体性を発揮しながら学びの文脈において、知識を構造化するための対話^{注4)}や学習した知識の意味付け、価値

付けをする活動を通して精緻化されていく学びを深い学びと考え、デザインしていく必要がある。このとき、主体性を発揮させるために、課題や問題の解決方法を自ら考え選択したり、時には課題や問題などを自ら見出したり、追究したりしていく場面を設定することで、中教審答申で掲げられた「個別最適な学び」が生まれ、生徒が主体性を発揮して学ぶ中で生じる対話などの活動において「協働的な学び」が行われると考える。

そこで、各教科において、主体性を発揮する具体的な手立てを考え、深い学びをどのように達成させていくのかを本研究のねらいとし、研究主題を「深い学びをデザインする授業づくり～主体性を発揮させることを通して～」として、研究に取り組むこととした。

Ⅱ 研究の概要

1 研究主題を実現させるための各教科の取り組み

主題設定の理由を踏まえ、本校としての目指す生徒像と主体性を発揮した姿を以下のように定義する。

【目指す生徒像】

自主自立と共生のできる生徒（学校教育目標より）

【主体性を発揮した姿】

課題や問題に対して解決方法を追究する姿

また、各教科においても、求められる教科教育の在り方や目の前の生徒たちの姿などを踏まえて、次のものを定義する。

- 各教科における3年間を見通した深い学びと目指す生徒像
- 各教科における主体性を発揮した姿とそれを発揮させるための手立て

以上のことを各教科で定義していく（後掲資料1）。その際、「各単元における深い学び」についてはもちろんのこと、「個別最適な学び」「協働的な学び」についても、指導案や単元計画の中で、どのように表れてくるのか示すこととする。「個別最適な学び」については、個の何にに応じて最適化していくのか、「協働的な学び」については、何の目的のために協働するのかを明確にする。

さらに、手立てによる生徒の変容を、育みたい資質・能力がどの程度育まれたのかを検証するための方法によって見取っていく。これによって、育みたい資質・能力がどの程度育まれたのか、資質・能力を育むための手立てが有効であったかを明らかにし、手立ての改善に努めていく。なお、生徒の変容を見取っていくに当たり、全体傾向を捉えつつ、その補助的資料として、抽出生徒を設定する。

2 各教科の研究主題

深い学びをデザインする授業づくりを進めるために、各教科において次の研究主題を設定し、研究を行うこととした。

教 科	研究主題
国語科	生活をよりよくするために 生きて働く言葉を用いることができる生徒の育成 ～言葉による見方・考え方を働かせる授業づくりを通して～
社会科	主権者としてよりよい判断ができる生徒を育成する社会科の授業 ～概念的知識を活用して判断する学習を通して～
数学科	数学的に考えることができる生徒の育成 ～数学的活動において「問い」を追究させることを通して～
理科	生徒が科学的な知識体系へのコミットメントを形成する理科授業
音楽科	音楽の意味や価値を創造する生徒の育成
美術科	新たな意味や価値をつくりだすことができる生徒の育成 ～主題を追求し実現させる授業を通して～
保健体育科	生徒が知識・技能を生成する保健体育科の授業 ～私たちのスポーツを創り上げることを通して～
技術・家庭科	よりよい社会の実現に向けて、 新たな価値を創造する生徒を育成する技術・家庭科の授業
英語科	「生きた英語」でコミュニケーションを図る生徒を育む英語科の授業 ～形式・意味・機能とその結びつきを意識した表現の工夫を通して～

3 研究計画

(1) 本研究シリーズの計画

本研究は、以下のような計画で研究に取り組んでいる。

1 年次	・ 理論（総論、各教科の教科理論）の構築とその提案
2 年次	・ 理論（総論、各教科の教科理論）の確立とその提案 ・ 研究紀要の作成
最終年次	・ 各教科の研究のまとめ ・ カリキュラムの作成

(2) これまでの研究の成果と課題

1 年次では、各教科の教科理論の構築をねらいとし、各教科における 3 年間を見通した深い学びと目指す生徒像を設定した。そして、各教科において、生徒が主体性を発揮した姿とそれを発揮させる手立てを提案し、「個別最適な学び」や「協働的な学び」を促しながら、それらの具現化を目指して研究に取り組んだ。

その結果、各教科で生徒が主体性を発揮しながら、深い学びの達成や目指す生徒像の実現に近づいた単元もあり、一定の成果を上げることができた。しかし、単元によっては、授業の中で主体性を発揮する姿は見られたが、深い学びの実現へ到達しきれないこともあった。その理由として、発揮された主体性が、深い学びへ向かうように、学びの文脈をつくりきれなかったことが考えられる。

そこで 2 年次では、主体性を発揮させる手立ても含め、単元構成や単元を貫く課題などを再考し、学びの文脈をつくることで、主体性を発揮した生徒が、各教科で目指すべき深い学びを実現できるよう教科理論を確立していく。

- 注1) エージェンシーは、「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」（OECD、2019）として定義されている。
- 注2) 本校でいう課題とは、学習において、教師が生徒に与えるきっかけとなるものを示している。また、本校でいう問題とは、課題に取り組む上で困難に直面することを示す。問題は個人のものに限定されず、グループや集団のものも含まれる場合がある。
- 注3) 本校では「単元で身に付けさせたい知識・技能に対して思考できる枠組み」と考える。
- 注4) 本校でいう対話とは、他者だけにとどまらず、ものやこと、自己などとの認知的な相互作用を示している。

引用文献

- 1) ヒーター・グレイ『遊びが学びに欠かせないわけ』築地書房、2018年、90ページ
- 2) 奈須正裕『ポスト・コロナショックの授業づくり』東洋館出版、2020年、75ページ
- 3) 白井俊『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来』ミネルヴァ書房、2020年、86ページ
- 4) OECD_LEARNING_COMPASS_2030_Concept_note_Japanese、OECD、2019年、3ページ
- 5) 中央教育審議会『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～』文部科学省、2021年、4ページ

参考文献

- 奈須正裕『次代の学びを創る知恵とワザ』ぎょうせい、2020年
- 諏訪正樹『知のデザイン 自分ごととして考えよう』近代科学社、2015年
- 田村学『問い、対話、振り返りによる 中学校の授業改革』小学館、2020年
- 田村学『学習評価』東洋館出版社、2021年

後掲資料 1

各教科における「3年間を見通した深い学び」、「目指す生徒像」、「主体性を発揮した姿」

教 科	3年間を見通した 深い学び	目指す生徒像	主体性を発揮した姿
国語科	テキスト（情報）を読み、言葉による見方・考え方を十分に働かせ、生活をよりよくするために生きて働く言葉についての考えを形成する学び	よりよい生活を送るために生きて働く言葉を用いることができる生徒	生徒が自分の学習に見通しをもち、課題解決に向けて、自らの捉えや言葉の用い方が最も妥当かどうか問い直そうとしている姿
社会科	社会的事象を多面的・多角的に考察し、概念的知識を活用して判断する学び	主権者としてよりよい判断ができる生徒	学びの文脈に沿って概念的知識を活用し、それを活用して社会に見られる課題について判断する姿
数学科	生徒が主体性を発揮して数学的活動における問題発見・解決の過程を繰り返し、知識の適用範囲を拡げたり知識を統合したりする学び	様々な事象について数学的に考えることができる生徒	数学的な見方・考え方を働かせて解決方法を考えようとしたり、様々な事象や課題解決の過程で生じた疑問から問いを見いだそうとしたりする姿
理科	科学知識へのコミットメントを高め、自然事象を科学的に思考すること	科学知識をひとまとまりの有意義な知識の体系として捉え、コミットメントを形成することができる生徒	科学の文脈における問題を科学的に解決する姿
音楽科	音や音楽に対する思いや意図といった音楽の意味を創り出したり、音や音楽のよさや美しさといった音楽の価値を創り出したりすること	音楽の意味や価値を創造する生徒	学習のねらいに対して見通しをもち、題材を通して音楽的な見方・考え方を働かせながら学習を進めていく姿
美術科	造形的な見方・考え方を働かせ、主題を表現することを通して新たな意味や価値をつくりだす力を身につけること	主題を追求し実現することで、新たな意味や価値をつくりだすことができる生徒	アイデアスケッチや制作の際に見通しをもち、さらに主題をより具体化し、主題を深めたり、こまめに自分の制作について振り返ったりする姿
保健 体育科	問題解決の中で生徒自らが解決策を考え、その上で実感を伴う知識・技能として獲得していくこと	豊かなスポーツライフの実現に向けて、知識・技能を生成する生徒	共通課題に対して、主運動を行う中で、生徒が様々な差に応じて、それぞれの問題を発見し、解決していく姿
技術・ 家庭科	よりよい社会の実現に向けて、複数の視点から最適な解決策である新たな価値を創り出すこと	よりよい社会の実現に向けて、新たな価値を創造する生徒	課題解決の対象である製作品や考え方を複数の視点から捉え、優先度について考え、視点間の関連性について理解する中で、最適な解決策を創り出している姿
英語科	形式・意味・機能を結びつけ、目的・場面・状況に応じた英語を用いること	「生きた英語」でコミュニケーションを図る生徒	課題達成のために自分に足りない英語表現等を問題として見出し、単元の中で問題を解決しようとしている姿